

サンフロント21 懇話会

〒410 沼津市魚町1番地
-8560 サンフロント5F
静岡新聞社・静岡放送
東部総局内
事務局
TEL 055・962・6520

2018.1.28 No.114



静岡新聞社・静岡放送社長
大石 剛



新年あけましておめでとうございます。ことしの正月、県内は天候にも恵まれ穏やかに新しい年を迎えることができました。株価も年明け最初の取引となる大発会は、大幅な値上がりを見せ、堅調な滑り出しとなりました。

世界経済の成長期待や米国などの株高を好感したものと思われる。

年明け、米国との緊張関係が続いている北朝鮮は、板門店の南北直通電話回線を約2年ぶりに再開しました。金正恩朝鮮労働党委員長が指示したとされます。韓国では開幕が迫る平昌冬季五輪への北朝鮮参加に期待が高まっています。ただ、核や長距離ミサイルの開発を止めようとする北朝鮮の意図は警戒すべきで、予断を許さない状況は続くでしょう。一方、トランプ米大統領がエルサレムをイスラエルの首都と認定したことを機に中東情勢も不安定さを増しています。

こうした中で、2020年東京五輪・パラリンピックまで残すところ1000日を切りました。県内では伊豆市で自転車競技が行われるほか、小山町などがロードレースの会場になる可能性が強まっています。開催準備を急がなければなりません。

当懇話会では五輪開催を契機に、地域におけるスポーツ産業振興を推進するとともに、新たな観光誘客やまちづくりを、引き続き支援していく所存です。会員の皆様の温かいご支援、ご協力を、本年もよろしくお願い申し上げます。

サンフロント21 懇話会代表幹事
スルガ銀行 会長

岡野 光喜



新年を迎え、会員のみなさまにお慶びを申し上げます。東部地域の活性化に向け、さまざまな提言を続けているサンフロント21 懇話会は今年、発足24年を迎えます。これまでも増して存在感を高

める年にしたいと存じます。

東部では昨年、サッカーJ3に参入したばかりのアスルクラロ沼津が初年度から首位争いを繰り広げる活躍を見せ、この地域を大いに盛り上げました。最終戦で優勝した栃木SCと引き分け、惜しくも優勝は逃しましたがJ2、そしてJ1への道筋を見せてくれました。ただ、J2昇格にはホームグラウンドがライセンスに必要な基準に満たないという課題も浮き彫りとなりました。

当懇話会は昨秋、にぎわいの拠点として複合型の新スタジアム新設などを柱とした沼津市の原・浮島地区まちづくり構想を川勝平太県知事、大沼明穂沼津市長に提言いたしました。沼津市は県や東部の市町、関連団体とスタジアム構想の協議を行う連絡会の設置を決めています。当懇話会はこの動きを支援していきます。

我が国は高齢化や人口減少による地方の活力低下が叫ばれています。こうした中で、東部地域が活力を取り戻すためには、新たな価値の創造が欠かせません。ことしも会員のみなさまの結束と、懇話会活動への一層のご協力をよろしくお願い申し上げます。

新年のご挨拶



静岡県知事

川勝 平太

明けましておめでとうございます。

皆様、お健やかに新年を迎えられていることと、お慶び申し上げます。

私は、知事就任以来、「富国有徳の理想郷“ふじのくに”づくり」を掲げ、ポスト東京時代における先導役を担うという気概をもって、それを実現するための「県民の県民による県民のためのマニフェスト」の実践に全力を傾注してまいりました。現在の総合計画は、皆様の御理解と御支援で10年計画を実質7年1カ月で達成できる見込みです。静岡県政は二度、マニフェスト大賞（グランプリと特別賞）に輝きました。

知事としての一期目から二期目への節目となる平成25年初夏、富士山の世界文化遺産登録と茶草場農法の世界農業遺産の登録とが同時に実現しました。それを皮切りに、韮山反射炉の世界文化遺産登録、朝鮮通信使の世界の記憶への登録など、本県の世界クラスの資源・人材群は4年半（54カ月）の間に64件にもなりました。実に1カ月に1件以上のペースで国際的評価を獲得しております。まさに、“ふじのくに”静岡県は世界の檜舞台へと立ち現れつつあります。

昨年末には、富士宮市に「静岡県富士山世界遺産

センター」が開館し、この春には、島田市に「ふじのくに茶の都ミュージアム」がオープンします。2019年春には、日本最大の観光キャンペーンである「デスティネーションキャンペーン」が本県で展開され、秋にはラグビーワールドカップ、2020年には、東京オリンピック・パラリンピックの開催と、“ふじのくに”静岡県の魅力を国内外に発信する絶好の機会が立て続けに到来します。

「東京から見た静岡県」ではなく、「世界から見た静岡県」という考え方に立ち、ローカルながらもグローバルに通用する“理想郷ふじのくに”を目指します。そのため新しい総合計画を、現在、策定中です。基本理念は従来通り「富国有徳」です。人をつくり、富をつくるのが二本柱です。徳のある人材（士）を育て、物心の豊かさ（富）が満喫できる政策を立案いたします。この地域に生きる誰もが、努力をすれば、みずからの夢を実現し、幸せを実感できる社会を目指します。特に夢のある若者が、志をもって努力すれば、夢がかなう“Dreams come true in Japan”の拠点となれるように、新しい日本のロール・モデルを目指します。

県土が安全で、県民が安心し、生活が安定する「県民幸福度の最大化」を目指します。安全の確保と福祉の充実を最優先にし、未来を担う有徳の人づくりと豊かな暮らしの実現につながる政策を実践し、本県の魅力の内外への発信に努め、国際交流を拡大させます。

県民の皆様が、明るい希望を持ち、居心地が良い地域づくりに全力で取り組んでまいりますので、皆様の御理解と御協力をお願いいたします。



沼津市長

大沼 明穂

新年あけましておめでとうございます。

平成30年の年頭に当たり、謹んで新春のお慶びを申し上げます。

市政をお預かりすることになってから早1年、これまで市長と語る会などを通じて市民の皆様との「対話」に力を入れるとともに、様々な媒体を活用した市政情報の発信に努めてまいりました。

昨年はアスクラロ沼津のサッカーJ3での大躍進など、大変明るいニュースがありました。新年を迎え、少しずつでも市民の皆様が「沼津が変わった」と実感でき、住み続けたいと思える「世界一元気な沼津」に向けて、市政運営を推進していく使命があると改めて感じております。

沼津には地元を愛し、活動している方が数多くいらっしゃいます。様々なイベントで活き活きとした皆さんの顔を拝見し、まちづくりの主役は市民であると再認識

いたしました。新年におきましても、市民の皆様の主體的な賑わい創出活動などを支援し、沼津は色々なことに挑戦し、実現出来るまちであるという風土を確立してまいりたいと考えています。

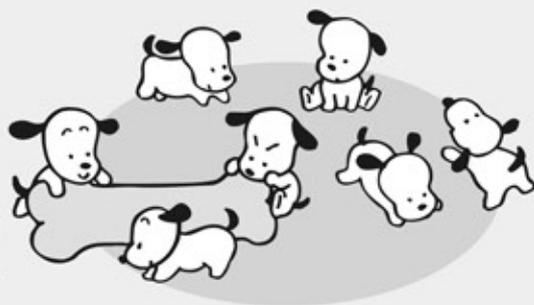
沼津のまちづくりについては、地震津波等の災害対策や子育て支援の充実など、多くの声を頂きました。子育て世代からお年寄りまで、沼津に住まう方、住んでみたいと思う方が安心して暮らせる環境づくりを引き続き進めてまいります。

また、沼津は海・山・川の自然、白隠禅師や御用邸記念公園をはじめとした歴史・文化など、多くの地域資源に溢れ、とりわけ沼津の海は新鮮な魚や各種アクティビティを体感できるだけでなく、その美しい情景は多くの人を魅了する、世界に誇るべき宝です。

今後、海外からの観光客の来訪機会も増えることが想定されることから、この沼津の海を最大限に活用し、観光都市・沼津に向けた戦略策定を進めるとともに、広く国内外に沼津の魅力を発信し、観光誘客の推進を図ってまいります。

今年一年、皆様の御健勝、御多幸を心よりお祈り申し上げます。年頭の御挨拶といたします。

われら 戌年生まれ



2018年（平成30年）は、十干（じっかん）十二支（じゅうにし）を組み合わせせた干支（えと）では「戌戌（つちのえ・いぬ）」になります。戌戌は物事が変化をしていく年と言われています。60年前の1958年（昭和33年）には当時世界一の高さを誇った東京タワーが完成し、本格的なテレビ時代の幕開けとなりました。また1958年後半から始まり61年まで続いた岩戸景気がありました。本年も年明け早々に日経平均株価は2万4千円をうかがう勢いで始まり、そうした予感もさせます。

戌年生まれの人は、律義で苦勞を惜しまない性格で、周囲からの信頼度も高いと言われています。そんな戌年生まれのサンフロント21懇話会会員の皆様に、新年の期待や抱負を寄せていただきました。



公益財団法人 佐野美術館理事長
三嶋大社責任役員

峰田 武

昭和9年11月24日生まれ

先代が新聞販売店を開業し50年以上がたちます。情報のグローバル化の中、新聞の必要性が問われる時代に入ったと感じます。この年齢になると平和への願いは、さらに強くなります。新聞も平和の一助となると信じ、自らも地域貢献に努めてまいります。

一陽来福、サンフロント21の会員の皆様におかれましては、希望に輝く新春をお健やかに迎えのこととお慶び申し上げます。

私の一年の事始めは、元旦早朝6時の三嶋大社の歳旦祭です。市長他来賓、約40名の皆さまと拝殿に参内して、宮司による祝詞奏上など厳粛な中に式典をとりおこないます。その際には、サンフロント21の会員の皆様のご繁栄も祈願させていただきますので、本年も共に頑張りましょう。



熱海商工会議所
会頭

内田 進

昭和21年11月23日生まれ

新年明けましておめでとうございます。
『馬上少年過ぐ 世平らかにして白髪多し』（戦場で馬を馳せた青春の日々は遠く過ぎ去った。今や天下は泰平。私の髪の毛はすっかり白くなった）。伊達政宗晩年の詩ですが、古希を迎え何かやり残したような後悔も感じながら、この先地域に貢献できますよう微力ながら邁進していきたいと思ひます。



(有)佐伯新聞店
代表取締役

佐伯 隆彰

昭和21年7月2日生まれ

あけましておめでとうございます。



雄大株式会社
代表取締役

土屋 雄二郎

昭和33年2月23日生まれ

いよいよ、還暦を迎える年になりました。最高に幸せを感じます。

人生の折り返し地点、これからの自由な人生の新展開がどのようになっていくかと考えるとワクワクします。

今までの経験を活かして、ドンドンと新たな挑戦をしていき、過去の時間は今のためであったと思えるような充実した人生を送ります。



清水物産株式会社
代表取締役

鈴木 幸彦

昭和33年3月5日生まれ

今年で還暦を迎えるわけですが、私は3月5日の早生まれですので私の同級生は昨年還暦を迎えた人が多く、昨年は取り残された感じがしていましたが、やっと追い付いた感じがします。しかし実際還暦を迎え赤いちゃんちゃんこで祝ってくれると言われても複雑な感じがします。

健康的な生活を心がけ悔いのない年にしたいと思います。



静岡県健康福祉部
健康増進課 技監

佐藤 圭子

昭和33年3月14日生まれ

新年あけましておめでとうございます。これまで、数々の方々にお世話になり心から感謝しています。

私は、小さい時から病気がちだったため、大人になったら病気の人に役に立つ仕事をしたいと考え保健師という職業に就きました。保健師は、地域の方々を健幸にする仕事だと思っています。これ

からもこの素敵な仕事を続けていこうと思います。



静岡県熱海土木事務所
所長

植松 静雄

昭和33年3月25日生まれ

新年明けましておめでとうございます。

戌年生まれですが犬というより猫好きです。3月で定年を迎え、これまでは従順な柴犬のように静岡県に仕えてきましたが、これからはトラ猫のように思いのままに生きていきたいと思っています。猫のように自立できる才能と皆に好かれる魅力があればですが…。



ブラサ ヴェルデ
館長

愛屋 博司

昭和33年4月3日生まれ

新年明けましておめでとうございます。

還暦はまだ先と思っていた私が、今年で60歳です。

ブラサヴェルデのグランドオープンの年に沼津に赴任して、4年目に入りました。その間、いろいろな方々にお世話になり大変感謝しています。

これからも、ブラサヴェルデとともに、地域に貢献できるように頑張っていきたいと思っています。



株式会社 静岡伊勢丹
代表取締役社長

雨宮 潔

昭和33年5月22日生まれ

新年明けましておめでとうございます。昨年開店40周年を迎えました静岡伊勢丹は、化粧品の拡大をはじめ、お客さまの関心度の高い『美』に関するご提案の幅を広げて参りました。本年は、既存の商売の殻にとらわれず、『健康』にも一歩踏み込んで、お客さまとの新たな接点が作れますよ

う努力して参る所存です。



静岡県富士土木事務所
所長

大石 俊一

昭和33年5月22日生まれ

新年あけましておめでとうございます。今年の5月には還暦を迎えます（“耳順”の境地には遙かに及びませんが……）。これまでお世話になった皆様への感謝の気持ちを忘れずに、少しでも社会に貢献できるよう、何事にも精一杯努力してまいります。



静岡県熱海財務事務所
所長

佐藤 裕靖

昭和33年6月7日生まれ

新年明けましておめでとうございます。昭和と平成の二つの時代をそれぞれ30年間、多くの方々に支えられて還暦を迎えることができました。新しい時代とともにスタートする第二の人生は、自分のため、家族のため、地域社会への貢献のため、前向きにチャレンジしていきたいと思えます。



伊豆市長

菊地 豊

昭和33年6月8日生まれ

5回目の年男の私は、明治150年に当たる2018年に還暦を迎えることになりました。明治維新は欧米からの強烈な脅威と圧力によるもの、戦後の新憲法による国づくりは事実上占領軍であるGHQによるものでした。そして今、私達は過去2回に匹敵する大変革期に直面しています。今度は、私達国民自身で決め、実行しなければなりません。



静岡県賀茂振興局
局長

北村 誠

昭和33年7月19日生まれ

新年あけましておめでとうございます。早いもので今年5回目の年男を迎えました。ここまで来られたのも皆様の支えによるものと大変感謝しております。還暦を節目に、より一層人生を楽しく送れるよう、新たな分野にもチャレンジし地域への恩返しも行いたいと思っています。



静岡県沼津財務事務所
所長

片野 光男

昭和33年10月27日生まれ

新年あけましておめでとうございます。三島市に生まれ、そして住み続け、早いもので還暦を迎えます。多くの皆様に支えられ、ここまでこられたことに感謝申し上げます。県では地域の活性化に向け、様々な事業を実施しております。その財源となる県税の確保に努めることで、少しでも地域に貢献できればと考えております。



賀茂農林事務所
所長

三輪 照光

昭和33年10月30日生まれ

あけましておめでとうございます。県に奉職して40年、これまで多くの方々に支えていただき、今があることに感謝しています。

伊豆は豊富な農林水産資源に恵まれたところです。微力ながらこの資源の付加価値化を高め、伊豆地域が元気になるよう尽力していきたいと考えています。



静岡県東部危機管理局
局長

萑澤 敬

昭和33年11月24日生まれ

あけましておめでとうございます。

精神年齢が実年齢に追いつかず、60歳という年齢が実感できませんが、組織に属する人間として大きな節目を迎えることになります。

これからは、個人としての自由度の高まりに伴い、新たな形で地域貢献できるよう努めていきたいと考えておりますので、よろしくお願いいたします。

地域の未来に少しでも貢献できるよう努めてまいりたいと思っております。



住友生命保険相互会社
沼津支社長

大久保 勝也

昭和45年7月29日生まれ

あけましておめでとうございます。

万博の年に生まれ、住生に入社し四半世紀。沼津での勤務も3年目となりますが、温かな皆さまに支えられ心から感謝しております。

今年は更に「人が人を支える価値」を推進し、地域の皆さまの未来をより強いものにできるよう努めてまいりたいと思います。



株式会社 鈴木工務店
代表取締役

千葉 慎二

昭和33年12月16日生まれ

明けましておめでとうございます。皆様にとりまして輝かしき一年となりますことを祈念申し上げます。満60歳となる今年は、ちょうど昭和で30年、平成で30年という節目にあたり、奇しくも当社の創業60周年とも重なります。新たな節目に向かって精進を重ねる所存ですので、皆様の倍旧のご支援をお願い申し上げます。



損害保険ジャパン日本興亜株式会社
静岡法人営業部 東部法人支社
支社長

藤山 茂

昭和45年8月11日生まれ

新年あけましておめでとうございます。「今年の自分は、昨年自分よりも劣らないように」と毎年思っておりますが、4回目の年男を迎えて、「レベル48」の人間となるよう、お世話になった皆さまへの感謝を忘れずに、前向きにチャレンジする年にしたいと思います。



積水ハウス株式会社 沼津支店
支店長

田村 泰樹

昭和45年3月20日生まれ

あけましておめでとうございます。

これまで多くの方にお世話になり、感謝致しております。

「住宅」に携わって早いもので26年になりますが、「住宅」は環境・エネルギー・コミュニティ再生・高齢化・健康長寿・教育等、様々な社会課題解決の中心にある産業という自覚を持ち、この



株式会社 沼広
代表取締役

勝又 寛治

昭和45年12月4日生まれ

新年明けましておめでとうございます。

もう一回りで60歳かと思うと、意外と時間が無いものだなあと実感します。

とりあえずあと12年を目標に地元密着の広告代理店としてどのように変化していけるか、また、地域に貢献できるかを模索し続けていきたいと思っております。

◎首相、秋の改憲発議に照準 自民総裁3選へ不退転



共同通信社 政治部長

小渕 敏郎

2018年の政局は、憲法改正論議の行方が焦点となる。安倍晋三首相は年頭会見で「今年こそ、憲法のあるべき姿を国民にしっかりと提示したい」と表明した。秋の臨時国会での発議に照準を合わせているのは間違いない。9月の自民党総裁選で3選を果たし、歴代最長政権へのレールを敷くことにも不退転の決意で臨む。野党各党は19年夏の参院選をにらんだ態勢立て直しが急務となるが、「1強多弱」を打開するための道筋は依然として描けていない。

自民党は改憲を巡り、自衛隊の9条明記など首相提案の4項目について意見集約を急ぐ。早ければ2月下旬にも衆参両院の憲法審査会で与野党協議に入りたい考えだ。

立憲民主党が自衛隊明記に反対していることを踏まえ、自民、公明両党と希望の党、日本維新の会の改憲勢力による発議を想定。政府高官は「秋の臨時国会がヤマ場になる」との見方を示す。

だが、9条改憲に関して公明は慎重姿勢を堅持しており、希望の党内にも異論がある。首相の宿願実現に向けては高いハードルが待ち受ける。

総裁選では石破茂元幹事長の立候補が確実視され、野田聖子総務相も出馬への意欲を隠さない。衆院選で大勝した首相が現段階では優位とみられるものの、政界は「一寸先は闇」でもある。1月22日召集の通常国会論戦などを通じた内閣支持率の動向次第では、3選に黄信号がともる事態もあながち否定できない。

北朝鮮情勢も不確定要素だ。首相は米国と緊密に連携しながら、圧力最大化路線を継続するが、金正恩朝鮮労働党委員長が核・ミサイル開発を放棄するかは見通せない。外交面では日中関係の改善を進め、習近平国家主席の年内来日につながることも課題となる。

参院議員主体となった民進党は立民と希望に3党での統一会派結成を打診した。これに対し、立民の枝野幸男代表は「巻き込まないでいただきたい」と明確に拒否しており、野党再結集への道のりは険しい。

◎景気に緩やかな回復継続 世界経済の拡大背景



時事通信社 経済部長

小島 洋

2018年の日本経済は、緩やかな景気回復が続く。世界経済の拡大を背景に輸出の伸びが見込まれ、企業業績の改善が期待できるからだ。大波乱がない限り、来年1月に景気回復期間が戦後最長を更新する。

安倍政権は経済政策「アベノミクス」の実績にできる景気回復の最長更新を意識し、積極的な財政出動を軸にした経済運営を行い、日銀も金融政策で歩調を合わせるだろう。

経済課題の一つは国内需要の拡大だ。東京五輪・パラリンピックを控え建設ラッシュが続くが、個人消費は盛り上がりを欠く。賃金が伸び悩み、株高で金融資産が増えた一部を除き、勤労世帯の多くは景気回復を実感していない。

「実感が伴わない」と指摘される背景には、賃金に加え、物価の伸び悩みがある。このため、4月に任期満了となる黒田東彦日銀総裁の後継者は、誰であっても大規模な金融緩和を続ける見通しだ。安倍晋三首相が産業界に要請した賃上げが実現して消費を刺激することができるのか。春闘が試金石となる。

産業界では人工知能(AI)、電気自動車(EV)、自動運転など次世代の技術開発が活発化する。労働者不足に適應する省力化投資の動向も注目点だ。製造業で相次ぎ発覚した不正問題では、産業界を挙げて信頼回復に取り組む年になるだろう。

世界経済は今年も米国がけん引役だ。トランプ政権の大型減税は米景気を刺激するとみられ、米国内で景気の過熱感が台頭する可能性がある。連邦準備制度理事会(FRB)は金融を引き締めて軟着陸を目指す。米景気の失速は日本経済の成長を脅かすリスクの一つとして頭に入れておく必要がある。

米国の保護主義化も要警戒だ。北米自由貿易協定(NAFTA)からの離脱にかじを切れば世界中に混乱をもたらす。中東・北朝鮮情勢の行方、中国経済の減速、世界同時株安も日本経済のリスクになる。

第23回伊豆地区分科会

伊豆の魅力と観光ブランディング

開催／2017年9月4日

会場／ホテルサンバレー富士見（伊豆の国市）



サンフロント21懇話会は9月4日、ホテルサンバレー富士見で第23回伊豆地区分科会を開催しました。主題は「伊豆の魅力と観光ブランディング」。基調講演では観光未来プランナーの丁野朗氏が「物語化による観光地域ブランディング」をテーマに、日本遺産登録への助言、伊豆の地域活性化に向けた提言をされ、観光ブランド化を一つのストーリー～物語としてとらえる手法について示唆に富んだ興味深いお話をうかがいました。パネルディスカッションでは菊池吉修氏（静岡県教育委員会文化財保護課班長）、宇田治良氏（白壁荘代表取締役）、朱珠氏（富士山浪漫之旅）と丁野氏が活発な意見交換を行いました。

主催者代表挨拶

静岡新聞社・静岡放送東部総局長

海野俊也

本日はお忙しい中、ここホテルサンパレー富士見におきまして伊豆地区分科会へ多くのご出席をいただきましたこと、誠にありがとうございます。

本日の伊豆地区分科会は伊豆の魅力と観光ブランディングをテーマにさせていただきました。サンフロント21懇話会の本年度の活動テーマとしまして、伊豆の魅力を究める一日本遺産申請への支援を挙げております。日本遺産の選定は文化庁が2020年の東京五輪に向けて各地に残されている有形無形の文化財をひとつのテーマ、ひとつのストーリーにまとめて地域の魅力を国の内外とりわけインバウンドに向けて発信するというものです。これまでに40道府県54件が認定されています。

当懇話会では昨年からは伊豆市と河津町を申請団体に、伊豆にしかない内外に向けて誇れるオンリーワン・ナンバーワンの観光コンテンツは何かを探り、こうしたコンテンツをどういうストーリーにまとめるか検討を重ねております。

この地には皆さまご承知の通り風光明媚な自然、豊かな温泉、この地を訪れ名作を世に著した文豪たちの遺産、そして日本一のわさび田など素晴らしい観光資源にあふれています。これをどうつなげていくか、本日の分科会はこのことを探ることになるよう期待しています。基調講演には文化庁が進めております日本遺産審査委員会委員で東洋大学大学院客員教授の丁野朗先生をお招きしました。物語化による観光ブランディングについてお話しいただき、さまざまなヒントをいただきたいと考えております。

パネル討議では県の教育委員会文化財保護課で県内市町の日本遺産申請を牽引しておられる菊池様、地元出身の文豪井上靖ゆかりの白壁荘の宇田様、中国ご出身でインバウンドの動向に詳しい富士山浪漫之旅の朱珠様、そして丁野様にも加わっていただきます。伊豆が元気になり、前向きになるご意見ご提案をいただければと思います。

サンフロント21懇話会は今年で23年目を迎えました。さまざまな提言、地域への支援活動が継続できますのはひとえに会員の皆さまのご支援のおかげであります。あらためて感謝申し上げますとともに、一段のご協力をお願いする次第でございます。

懇話会代表挨拶

サンフロント21懇話会運営委員長(伊東法律事務所所長)

伊東哲夫

伊豆半島は南の海から来た火山の贈り物、と言われる地区でございます。過去には数多くの文豪がこの伊豆地区をこよなく愛し、訪れ、文学の執筆に精を出したところでございます。その結果、多くの作品が世に出て、今でも世界的な名著もございます。このような伊豆の魅力を再確認し、伝統を保存する一方で新しいものに転換し、未来へ向かっていこうというのが本日の狙いでございます。基調講演では観光資源のブランド化に精通しております丁野朗様に、伊豆観光のブランド化をどう図り、物語化し、どう未来につなげていくかを我々に示唆してもらえるものと思っております。

パネルディスカッションでは伊豆の魅力や観光のブランド化、そしてインバウンドを迎えるにはどうしたらいいか、現在懇話会が取り組む日本遺産申請の状況や今後どのような手続きを経て日本遺産となるかをお話しいただき、さまざまな観点からパネリストの皆さまにご議論いただこうと思っております。

今日の基調講演とパネルディスカッションが伊豆地区の皆さまにとって有意義になりますことを期待いたしまして、私の挨拶とさせていただきます。

基調講演

「物語化による 観光地域ブランディング」

観光未来プランナー

講師 丁野 朗氏



みなさまこんにちは。今日は久しぶりの伊豆でございまして、遊びではもちろん下田に至るまで踏破しておりますが、最初に仕事でお邪魔したのは今から7～8年前、ちょうどこの伊豆の国市エリアです。

今日は文化庁日本遺産の話をしませんが、経済産業省が近代化産業遺産33群を2年間で調査し、合計66の日本を代表する産業のストーリーを書いたんですね。その中には当然ですが鉄の歴史があり、日本の鉄はオランダから入ってきて佐賀、そして薩摩の島津斉彬が集成館事業を興し、それが葦山やひたちなか、そして最後は釜石で日本最初の高炉による鉄の出銑へとつながるわけですが、その重要な拠点の一つがここ葦山です。産業のストーリーは文化のストーリー以上に非常に広域にまたがるテーマが多いのです。世界文化遺産に選ばれた明治の近代産業革命遺産は釜石から薩摩まで非常に広域ですね。

近世から近代への転換期、さまざまな地域が密接なつながりを持ち、連携をして日本の産業を生み出していきました。今日お話しする日本遺産も、たとえば北前船のように北海道から日本海を渡って門司から瀬戸内海を通過して大阪へ着く。北の魚イワシやニシンの肥料が畿内の兵庫・岡山の綿花の栽培につながり、そこで東洋のマンチェスターといわれる巨大な綿花産業になるのです。やはり一つの地域だけではなく、どういうつながりを持ちながら日本地域、そして世界とつながっているのか、そんな視野を持ってみていただくと、この伊豆もとっても魅力あふれる地域なんじゃないかなと思います。

広域連携の重要性～ 観光客は「鳥の目」でやってくる

広域連携の重要性、つまり伊豆は一つということ。海外から来られた人にとって伊豆はもちろん、富士箱根も同じ圏域です。観光客というのは鳥の目を持ってやってきます。皆さんも遠方や海外に行かれるときは、飛行機で行かれるわけですから「鳥の目」を持っている。ですから鳥の目で地域全体がどう見えているかを改めて考えなければなりません。

吉田初三郎が昭和2年に描いた鳥瞰図のうち、静岡県を描いたものでは富士山をめがけて飛んで来た鳥の目で県全体を俯瞰しています。中心には牧之原の茶園。つまりここに人に来てもらいたいと思って描いた広域絵図なんですね。

初三郎さんは極めて広域なエリアのとらえ方をしますが、静岡の町なら町中をずーっとアップし、細かい路地も精密に描いています。拡大しても路地がきちんと見えます。観光の絵図面というのは、たとえば都市計画で使うような都市計画図は正確ですから構わないんですが、都市計画図を見てここへ観光に来たいと言う人はまずいないでしょう。私たちが初めて行く町で何をするかといえば、ドイツの都市ならその都市がどういう位置にあるのか、さらにどういう歴史の中で現在があるのか、これが実はとても大事なのです。地域というのは歴史のつながりの中で今がある。そういうものをちゃんと見ておかないと、今現在の街中のこじやれたショップやカフェや高層建物があるということだけでは観光客は満足しません。この町がかつてハンザ同盟に加盟していてこんな町の造り方をしているんだというのを見る。それが「鳥の目で

地域を見る」ということなんだと思います。

四半期ごとのデータ集計は基本のイロハ

その鳥たちが今たくさん来ています。小泉政権が2003年にヴィジットジャパンということを行い始めた。最初の頃は調子が良くて500万人ぐらいの観光客が800万まで増えた。その後2008年に観光庁が出来た年から皮肉なことに全然伸びなくなった。当時私は余暇開発センターにいまして観光庁へも一日2～3回は出入りしていましたので、「これはひょっとしたら政策が間違っていたんじゃないか」という声も聴きました。

初代観光庁長官の本保さんは北海道ご出身で今、首都大学東京で教鞭を取っておられる方なんです。当時の観光庁は限られた人数と限られた予算で、日本の観光行政を仕切るのに職員がたった100人でそのほとんどが出向者。これでは勝負が出来ないと、彼はインバウンドに舵を切ったんですが、しばらくは結果は出ない。仕方ないですよ、リーマンショックや3・11がありましたから。

ところが、あきらめかけていた2013年頃からグリーンと伸びてきます。観光庁は潜伏期間中にビザの問題や国別の調査を行い、どの国の人がどういうことに興味を持っているかマーケティングをしっかりとやった。その他もろもろの施策が奏功したといえましょう。

今、国内の観光客数は4400万人です。4400万とサラッと云いますが、これはすごい数字です。静岡県は日本では8番目。静岡県の上が北海道です。静岡県の下は意外にも京都府です。しかも静岡の中でも伊豆が占める比率がものすごく大きい。数的に言えば熱海と伊東がドーンと多いということになります。実際に伊豆の年間宿泊者数は1100万人です。京都の年間宿泊者数は1400万人です。ということは、伊豆は京都に匹敵するほどの大宿泊地になっているんです。これは皆さんもっともって自信をもって自慢していいと思います。かつて伊豆の宿泊者数は年間2000万人を超えていましたから、若干減ってはきていますが、それでも大きなボリュームゾーンになっています。

残念ながら、伊豆には訪日外国人数の公式統計がありません。北海道や京都はものすごく細かい調査をやっています。高山や小樽といった観光先進地もちゃんと取っています。

インバウンドに力を入れるならデータがなければ勝負になりません。どの国の人がどの地域を訪ねてどんな感想を持って帰ったかを四半期ごとに

きちんと調査する必要があります。企業経営で言えばイロハのイですね。そういうデータをちゃんととれるようにしなければなりません。

日本遺産が目指すのは地域活性化

その後、2020年に訪日外国人を4000万人、2030年には6000万人という目標数値が出た時は、観光庁の職員一同、私どもも含め、皆ひっくり返りました。やっと2000万人達成したかと思ったら、もう4000万人かと。実際問題、空港やホテル、二次交通のキャパの問題どれをとってもすぐにクリアできる話ではありません。今やっと観光庁の中では4000万人を受け入れるための基本的なアクションプランが出来ました。残念ながら6000万人受け入れというのは今のところ幻の話ですが、国際観光立国というからにはドイツ(5600万人)並み、中国が今6000万人超ですから、日本もそこまでもっていきたいですね。6000万というのはそういう意味の目標値です。これをきちんとトレースするには羽田、成田、中部、関空の4空港だけではとても無理で、地方空港に頑張ってもらわなければなりません。富士山静岡空港もフルに使わなければなりませんね。

お手元の資料では、いわゆる先進国を目指すための3つの視点と10の改革を挙げてみました。とくに注目するのは文化財です。文化庁も登録文化財制度を設けて「活用なければ保存なし」という言葉を使ったりして努力してきましたが、トータルで見えていくと文化財は保全優先で、言葉は悪いですが「見せてあげる」という風土がまだまだあります。

たとえば赤坂離宮や二条城といった日本を代表する文化財は開放されていません。海外はどうでしょうか。我々が海外に行ったときには文化財にもどンドン入っていけますし、各国を代表するようなミュージアムは観光のゲートウェイやインフォメーションセンターになっています。

日本も2020年までに文化財活用200の拠点を作ろうということになりました。200のうち日本遺産は100、残りの100は歴史文化基本構想—地域ごとの歴史文化をストーリー化し活用計画を作ることです。まだまだ少ないのですが、日本遺産はこういう背景の中で出て来た制度です。日本遺産というのは確かに地域のストーリー化やブランディングであるわけですが、最終の到達点は地域の活性化です。今、日本遺産や世界遺産の所管官庁は文化庁ですが、日本遺産という制度を最

初にプッシュしてきたのは内閣府です。つまり地域活性化策の起爆剤として日本遺産を使いたいということ。その中でいろいろな日本遺産の取り組みが各地で進んでいます。

日本遺産とは、 日本を代表・象徴する100の物語

日本遺産は今年4月28日に新たに17件が認定され、現在54件が登録されています。今さら日本遺産とは何かという話を振るわけではありませんが、文化庁の解釈としては、今まで文化財指定というのは保全するのが主で、どちらかといえば単品主義でしたが、考えてみればなぜこの地域にこういう文化財や史跡が残っているのか、その裏側には地域の歴史的な風土背景や地政学的にここでしか生まれなかった文化があるはずで、そういうものをきちんとストーリー化することによって、地域のブランドになる—そういう発想が日本遺産なのです。

日本遺産は、実は海外への発信がとても弱いため、海外ではどういうふうに関わるのか、そのプロモーションに力を入れています。私流の解釈では『日本を代表・象徴する100の物語』。たとえば和鉄のタタラ。いまだに奥出雲横田の町の中で日本美術刀剣保存協会がタタラを造っていますが、これがなくなれば日本の刀剣が途絶えます。刀剣というのは日本人の精神性の一番深いところにあるものですから、こういうものを、日本を象徴するような100の物語として指定しようということなのです。

日本遺産を認定するときには3つの大きな要素があります。ひとつはストーリー自体が面白いかどうか。今までにない新しい物語か、訴求しやすいテーマか、希少性はあるか、その地域を象徴しているか、といった観点からストーリーの面白さを見ていきます。

従来の行政なら重要文化財のランキング等で希少性から判断したと思いますが、日本遺産は文化財のランキングではなく物語の認定であり、文化財としての価値が高いか低いかは二の次です。よく世界遺産と日本遺産のどちらが偉いのかと聞かれますが、まったく違うものですね。世界遺産はイコモスが認定し保全を優先しますが、日本遺産はこれを使って地域を活性化しようというものです。

ストーリー性よりも継続性や発展性を重視

実は今日、強く申し上げたいのは、過去の物語はすごいけど未来はどうするんですかということ。この地域は未来にビジョンを持っているのか、こういう歴史的資源を使って将来どういう発展を目指しているのかということです。ビジョンを実現するためのシンボリックな事業が計画できているのか、その計画を実現するための態勢はできているのかどうか。日本遺産の第3期が終わり、委員会の中で私もこの話を頻繁にしますが、なんとなれば補助金は3年間で途絶えますので、補助金が終わったら事業が終わりではどうしようもありません。

来年以降もDMO等いろいろな地方創生がらみの支援策がありますが、ようは地域が自走できる態勢をどうつくるか。民間企業等もどんどん入っていて事業継続できる体制にしていかなければなりません。日本遺産も実はそこまで来ています。来年の申請においてはストーリー性よりも継続性や発展性が厳しくチェックされます。物語だけしかない事業や、認定後も看板やパンフレットしか作っていませんというような事業は、認定取り消しという議論も中では始めているところです。

初年度（2015年度）に認定された日本遺産で、パッと目を引くものでは「かかあ天下」というのがあります。申請したのは群馬県富岡を中心としたシルクの産地で、織物産地はどこでも女性が生産活動に参加していました。かかあ天下という言葉の意味はイタリアでもフランスでも通じるのです。かかあ天下ってどういうことってその国の母国語で訳すと「そういうことね、うちと同じね」って共感を得られるんですね（笑）。

2年目の2016年度に認定されたものでは、飛び地の共通テーマによる日本遺産が出てくるようになりました。たとえば私も今深く関わっている鎮守府4都市—横須賀・呉・佐世保・舞鶴ですね。鎮守府はある意味、日本の防衛の拠点であり日本の産業の拠点でもあり、その技術が脈々と今につながっています。そういうものを未来に向けて投資しよう。

この4都市は昨日今日のおつきあいではありません。1950年に平和転換法（旧軍港市転換法）という法律が出来て以来70年にわたり、この4都市は今でも3カ月に1度市長が東京に集まり、4都市共通の課題について密接に話し合っています。とっても仲がいいんですね。鎮守府の話をした時もその場で市長同士がパーッと決め、とって

も早かったですね。

今年の4月28日に認定された2017年度登録分では北前船、鶴岡のシルク等。面白いところでは足袋。それから熊本の「米作り、二千年にわたる大地の記憶」は私がとても好きな日本遺産です。米といえばもはや北海道ですね。魚沼のコシヒカリは単価が高いものですが北海道が抜いてしまったでしょう。しかし米作りは昨日今日始まったものではなく、熊本県北部の菊池川流域では2000年前から米作りが始まっていました。なんとなれば福岡県一県の中で古墳が50しかないところ、菊池川流域には250もの現代アートと見紛うような装飾古墳があるのです。それだけの古墳群があるということは財があったわけです。それが米作りであり、農業用鉄器も多数出土しています。2000年に亘ってこの地域では米を作り続けてきた。かつて近世の時代は加賀の米と熊本の米が日本のブランド米で、大坂では高額で売れたそうです。こういうことも一つのストーリーになりますよね。

わさびも同じでしょう。何か物に着目するとき、裏側にあるバックストーリーを語る。単にわさびがうまいというのでは物語になりません。そんなわけで、3年間で54件が認定されました。毎年最終応募数は80件ぐらいあり、17~18件が認定されるわりと狭き門です。

日本遺産登録ゼロの静岡県

この3期を通して日本遺産の認定のない県が7つあり、実は静岡県が含まれています。考えてみればなぜ静岡県にないのかとても不思議です。もうひとつ不思議なのは東京都も認定ゼロなんです。東京を代表する日本遺産は何かと聞かれると、とても難しいでしょう。東京が何を持ってきたかと言えば武蔵国国分寺。3年連続非採用でした。東山道と東海道をつないだバイパス線上に国分寺が集中しているんですね。一種の古代フリーウェイが4間12m×長さ約500mだけ残っています。周りはビルだらけなんですけどね。ポツンと残っているんですが、これを日本遺産にしたいといっても、目に見えてその地域が想像できるようなものではない。世界遺産だったら絶対アウトです。世界遺産の場合は確実に当時のまま残っていることが条件です。

日本遺産の中で私が特に重視しているのは、対外的にプロモーションするとき誰がやるのか。行政かマスコミか、そうではなく地元の人がプライドを持って語れることが重要です。2年3年の話

ではなく、市民が未来に亘って「我々の地域にはこんなすごいものがあるんだ」と誇りをもって語れるようであれば本来の日本遺産の意味にならないと思っています。

事例に学ぶ一

奥出雲タタラ、信州の火焰型土器と雪の文化

奥出雲タタラの事例についてお話しします。私は昔からずっとこの地域に入っていて日本遺産にしたいとご相談を受けた時、確かにタタラは素晴らしいのですが、皆さんの心を打つ共感ポイントはどこかがいま見えなかった。

ここには棚田がたくさんあります。少し変わった地形で日当たりがものすごくいい。タタラ鉄を掘る時、山を崩し、鉄穴ながしといって水を流して平地にする。それが田んぼになったのです。鉄が含まれた土地ですからすぐに米は出来ないため、土壤改良の意味を含めて蕎麦を植えました。それが出雲蕎麦のルーツになった。作業の時には牛馬も入れたので、それがのちに出雲牛になったのです。そういう身近なものをどうやって整理してストーリー化するかがポイントでした。

この地域は今では2市1町ですが、昔は5市町村でした。この5市町村が〈鉄の道文化圏〉という大きな構想を描いた。小さな自治体同士なのでかぶらないように、1市町村ごとにテーマを分担しました。古代鉄を作っていた場所、近代製鉄に転換した場所、今まさに刀剣を作っている場所、民話民俗をベースに展示する場所というように分けて、同じような投資をしないで無駄を省き、一番強いものに投資をしてつなぐ。それを〈鉄の道文化圏〉という共通項で括る。いわば今の観光圏DMOの考え方の発祥なんですね。その点を地元の人たちは忘れてしまっているの、口を酸っぱくして言っているわけですが、ストーリーや骨格はもともと出雲国風土記に書かれていますので、これも一つのエビデンスになります。

この鉄が北前船交易によっていろいろな地域と結ばれる。鉄師というのは地元の殿様よりも裕福ですから豪華な茶室や庭園文化にもものすごく凝る。最後はこういうものを未来に向けてヤスキハガネのようなブランド鉄として育てる。それをさらに事業として転換していく。こういう構造を作ったわけです。

2つ目に紹介したいのは「なんだ、コレは！～信濃川流域の火焰型土器と雪国の文化」。なんだコレは？って言い返したくなるようなタイトルで

すが（笑）、タイトルって大事なんですね。人の目を惹きつける。皆さんピンときたと思いますが、岡本太郎がこの火焰型土器を見た時「なんじゃこれは」と言った。それをそのままタイトルにしました。

私は地域の特徴をとらえる時、地域の地形や地質というものをベースにします。その上に生物層、社会層があり、全部つながっている。信濃川流域40万年前の河岸段丘の上に縄文集落ができ、土器が作られる。そして苧麻（からむし）がたくさん採れたので織物産地にもなった。雪がたくさん降ったので、織物産業にとっては雪晒しにもなった。雪国ならではの雪と暮らす・雪を食す・雪に祈る・雪を織る・雪と遊ぶというコンセプトで組んだわけです。

国宝にも指定された火焰型土器は信濃川河川敷に沿って見事に分布しています。一方でアンギン（織布）が越後縮になり、今は明石織という織物に転換している。この地形地質と生物種がこの地域の産業を作ったわけです。

とにかく「雪」がこの地域の大きなキーワードになります。へきそばは皆さん召し上がったことがあると思いますが、わざわざこういうふうにくるくるっと巻いて出てきます。この造形は織物の「かせおり」の動作から来ているといわれます。そばのつなぎには「ふのり」を使うんですね。こういうユニークなデザイン感覚は原型が火焰型土器にあるのではないか。ここでは大地の芸術祭というのを5年ぐらいやっていますが、こういうアートの遺伝子が伝わっているのではないかと思います。

雪中食では雪の下にんじん。甘みがグーンと上がって美味しいですね。伊豆の中にもいろいろな食べ物がありますが、なぜ美味しいのか立証しなければなりません。

地元では資源を活かした地域内の着地型ツーリズムを展開しています。北陸新幹線開通により特急がなくなり、ほくほく線や飯山線といった地域の二次交通をなんとかしよう。一種のモータリマネージメントをしっかりとやることによって、小型のピークル、自転車、ナビゲーションをしっかりと使って目的にちゃんと行けるようなしくみを作っています。

地元が見どころしても外からザラッと見える、それが観光の出発点

さて伊豆の話です。皆さん重々承知の話だと思

いますが、川端康成さんだけでなく、いろいろな方がいろいろな言葉を残しています。その中から伊豆のキーワードを探してみたいと思います。

「伊豆半島全体が大きな公園である、ひとつの遊歩場である」……いい言葉ですね。何か日本遺産のタイトルを考える時のベースが隠されているのではないかと思います。そんな中でも現状ではいろいろな問題を抱えています。ひとつは南北問題。伊豆では車で動いている人が8割です。車で来ることの利便が死活問題なんですね。災害や医療の問題にもすべて影響が出ています。そのことによって若者が外へ出て行ってしまっている伊豆縦貫道の日も早い全線開通を願っています。

伊豆には強みのあるストーリーがたくさんあります。文学文豪、わさびもそうですね、そういうものを地域の全体の物語としてしっかり組み立てなければならぬ。単に文豪が泊った温泉宿だけなら日本国中いくらでもあります。有馬温泉も城崎温泉もしかりです。あえて伊豆が日本の文豪と温泉を象徴する代表地域であるということを立証しなければなりません。

ジオパークの形成—南の火山からの贈り物という世界については、今日は三島市の副市長がいらっしゃると思いますのでヨイショするわけではありませんが、三島駅のすぐ裏側の湧き出る水は素晴らしいですね。あれだけの水が街中に流れているというのは第一級の資源です。他にありません。三島の湧水はまさにこの地形が生み出したものであり、三島のウナギは日本一うまいと公言しています。

そういう生物層の中に伊豆ならではの暮らしの文化や食・産業があるわけで、これを一気に通貫で説明することが大事です。文学でこようと水でこようと何でもよいのです。それがこっちまで突き刺さらなければならぬ。全体のストーリーをどう描くかが今日の課題です。

今日は中国から朱さんがいらしているので、伊豆の中の皆さんがスルッと見過ごしているもので、ザラッと感じるものがいっぱいあると思います。観光というのはそれが出発点です。それをさらに編集することで、大きな地域の編集された宝物になるのです。

滞在型観光とフルアテンド

地域の資源を活かすということにはいろいろな見方があります。要は、よそから来た人にとって何が面白いのか、どこが共感ポイントかをしっかりと見定める必要があります。逆に皆さん方が書く

物語は強い物語かもしれませんが誰も共感しない、そういう物語を創ってはだめです。共感と感動がキーワードです。

極端な例を一つ上げますと、四国の山の中のまた山の中の、人間よりも案山子の数の方が多いという徳島祖谷の「にし阿波観光圏」は、1個だけあるNPOが“千年のかくれんぼ”をコンセプトにして小屋を作り、ほとんど口コミでこんな山の中に1万人の外国人が来ています。人口何百人という山村集落ですから、ただ事ではありません。こういうところは1泊2日の旅はあり得ない。もったいなくて、行き来だけでも大変ですから、来られる方は1週間から10日間滞在します。

日本はバカンスという概念をついぞ捨てて来た国です。観光という言葉は使ってもバカンスとは言わないでしょう。バカンスの定義はフランスで4日以上自分の拠点を離れて外で暮らすということですが、日本人の年間平均宿泊日数は2.0日みたいな世界です。つまりあらゆる平均的な日本人はバカンスを経験していません。

外国人はたとえば中国や韓国など近い国からは5泊6泊で来る人もいますが、ヨーロッパから来る人は10泊とか11泊といったスパンで来ます。今はいろいろな観光地を回っていますが、これからはきっと気に入った場所に毎年やってきてそこで暮らすというパターンが増えるでしょう。アメリカのアスペンのように毎年10日間そこで暮らす。夏の間は今年もここで過ごしたよという場所を持っている。その意味で、伊豆はものすごく大きなポテンシャルを持っている地域で、ちょっと恋しくなれば横浜東京まで戻れば都会的な環境が手に入る。沖縄の南の石垣島もいいですが、一度行ったらなかなか帰れません。

私はそろそろ、ガイドという言葉や、ランドオペレーターという言葉に変えたほうがいいと思っています。つまりフルアテンド。にし阿波観光圏もフルアテンドです。つまりお一人4万から5万頂いて、2日間ご案内すれば一人10万で、3人なら30万。フルアテンドで十分やっています。ガイドで原価計算したら一人2500円ぐらいにしかならないといった方法はぼちぼちやめたほうがいい。ちょっと乱暴な発言ですが。

地域の中には目に見えない民俗、祭、伝承といったものが心を揺さぶります。形にならないものも大事ですね。それから地域資源を活かすしくみ。北海道には北海道遺産というのが50くらいあって道庁には予算がなくて保全に困っていたのですが、北海道イオンと連携し、北海道遺産WAON

というのを作ったのです。札幌・函館・小樽等のマーケットで1300億円ほどの売り上げのうち1%が還元されるというもの。毎年1300万円自動的に入り、何に使ってもいいのです。これで北海道遺産の活用管理をしています。伊豆WAONというのも充分出来るんじゃないでしょうか。

稼げる事業になれるか

伊豆半島のグランドデザインには世界一美しい半島プロジェクトがあります。「美しい」で提供できる顧客価値とは何でしょうか。環境の美しさ、人々の暮らしの美しさもありますが、人の美しさ—「ご覧いただく」「見せていただく」交流こそが観光の本質です。その一部を実践しているのが四国のお遍路宿です。こういう具体的な価値に落としていくのが大事です。

最後に日本遺産に向けた取り組みと課題を整理しておきたいと思います。くどいようですが、魅力的なストーリーを作る。これは当たり前のことですが、このことが地域の未来への発展ビジョンとしてどうつながっていくか。ビジョンを具現する戦略的な重点的な事業は何か、事業を推進する態勢づくりができていくか、民間主導の持続的産業化が可能か、ですね。

最後にひとつだけ。北前船が今年日本遺産になりました。11の市がかついでいますが、さらに追加認定で30ぐらいの市町村が入ってきます。しかし補助金があるうちはいいですが、それ以降の対策としてANAやJALはじめ民間企業合計10社で推進機構を作り、行政のお金に頼らない民間ベースの受け皿を作りました。

伊豆も日本遺産をとったとき、言葉は悪いですがどれだけ稼げる事業に出来るかがポイントになると思います。ご清聴ありがとうございました。

■講師プロフィール

東洋大学大学院国際観光学部客員教授、多摩大学大学院経営情報学部客員教授、法政大学大学院や跡見学園女子大学で客員教授として教鞭を取るかわら、株式会社ANA総合研究所シニアアドバイザーを務める。

1950年高知県出身。同志社大学を卒業後、マーケティング及び環境政策のシンクタンクを経て、1989年に余暇開発センター入所、2002年、社会経済生産性本部（現・日本生産性本部）に移籍。2008年、社団法人日本観光振興協会常務理事・総合調査研究所長就任。2016年6月に常務理事を退職し、現職。

パネル 討論

伊豆の魅力とインバウンド



〈パネリスト〉

丁野 朗氏 (観光未来プランナー、東洋大学大学院客員教授、ANA総研シニアアドバイザー)
 菊池 吉修氏 (静岡県教育委員会文化財保護班長)
 宇田 治良氏 (白壁荘 代表取締役)
 朱 珠氏 (富士山浪漫之旅)

〈コーディネーター〉

中山 勝氏 (サンフロント21懇話会TESS研究員)

◆中山 今回のパネルディスカッションは皆さま方も覚えていらっしゃると思いますが、2年前にこちらの会場に基調講演でお見えになった全国街道交流会議の古賀専務理事が最後に「この伊豆地域はたくさんの文人文豪が滞在し、小説を書かれている。文豪墨客をテーマに日本遺産の登録を目指したらどうか」とおっしゃったのがきっかけです。昨年度は伊豆の国市から伊豆市に場所を変え、文豪墨客と温泉をテーマに嵐山光三郎先生に基調講演をお願いしました。川端康成先生ゆかりの福田家様の女将さんはじめ多くの方にご登壇いただき、パネルディスカッションを行いました。このテーマに関しては今回で3回目ということになります。ですので今回は日本遺産申請に向け、より具体的なお話をしてもらいたいと思います。よろしくお願ひします。

物書きが缶詰めになれる宿

◆宇田 湯ヶ島の宇田治良でございます。日本遺産は伊豆市と河津町が目指していますので、文学というテーマについて、井上靖ふるさと会会長として、また地元観光協会の人間として頑張らせていただこうと思います。

湯ヶ島の白壁荘は客室24で、テーマは民話と民芸です。なぜこのテーマになったかと言いますと、設立当時、いろいろな方が協力をしてくださいました。静岡にいらした日本民芸協会会員で、芹沢銈介先生の同級生でもある小川龍彦先生一晩年は芹沢銈介美術館館長をなさった方ですが、その先生が白壁荘の名付け親でございます。

一部設計やデザインは銀座「たくみ」が担当し、織物研究家の先生にもご協力をいただき、食器は民芸の益子焼、布志名焼、小鹿田焼を使用しました。建物は古材等も使っており民芸調の変わった建物

になっております。

先代はいろいろな出会いがあったのですが、農家から機織り機を譲り受け、壁に埋め込んだ部屋を作った。その部屋を命名するとき、朝日新聞に山本安英先生の『夕鶴』のポスターが一面に掲載されていて、それを見た先代が『夕鶴』と名付けました。夕鶴の作者木下順二先生はその当時、近くの溪山荘に泊まっておられたのですが、先代と親しかったある先生が木下先生を白壁荘にお連れしたのです。木下先生は『夕鶴』という部屋の名前に気分を悪くされ、「著作権侵害じゃないか」とおっしゃられたのですが、どういうわけか先代とウマが合いました、それから白壁荘の協力者になってくださいました。そしていろいろな方を紹介してくださいまして、物書きの方が缶詰めになる旅館としてその時からスタートしました。ある経済学者の先生から「リーズナブルで仕事が出る宿はないか」と相談を受けたときは、そういう部屋を作ったりして、文学者や学者の方々に使っていただける旅館となったわけです。

湯ヶ島の現状でございますが、湯ヶ島のピークは平成3年で、今はその半分になってしております。最盛期には35軒ありました旅館も今は15軒です。これから平成30年度には縦貫道が月ヶ瀬まで伸びてまいりますし、2020年には東京五輪自転車競技の会場になりますので、それに向けて我々も一生懸命頑張っております。

伊豆半島全体に言えることですが、ほとんどがマイカー利用で、首都圏からのお客様が非常に多い。東京神奈川だけで50%です。ただ哀しいかな地元東部地区のお客様は10年前に比べると減っております。理由は、たとえば昔はご家族3世代で一緒に見えた方が核家族化で減ってしまったり、企業の招待というものも減っております。やはり沼津三島の方にもっと多く入っていただけるようキャンペーン等もやっていかなければと思っております。

インバウンドですが、ヴィジットジャパンが始まる前は私どもにはだいたい年間100人ぐらいの外国人のお客様がお見えになっておりました。今年はだいたい500人で5倍に増えているわけで

ございますが、一番増えているのは中国と香港、その次がヨーロッパです。10年前はヨーロッパが主力で3～4泊のお客様がほとんどでしたが、最近では1泊がほとんどで泊数が減っております。目標は年間1000人でございますので、いろいろなところにインバウンドの営業セールスをかけていきたいと思っています。

伊豆市では今月22日に台湾ロータリークラブの自転車部の受け入れがあります。天城だけでなく沼津から下田まで4泊で46人ぐらいの方が天城越えをしますのです、そのような受け入れも行います。それがうまくいけば毎年自転車で台湾から入って来るのではと期待しています。

インバウンドのほうはゴールデンベルトから外れておりますので、外国のお客様にもっとアピールする何かが必要ではないかと思っております。

◆中山 ありがとうございます。今お越しになっている観光のお客様はどういうところへ行かれ、どんな体験をされているんですか？

◆宇田 10年ぐらい前から体験型とかグリーンツーリズムという言葉が出てくるようになりましたが、結果として修善寺から天城へ来て温泉でゆっくりされるという方がほとんどです。中には自転車に乗ったりしてアクティビティに過ごされる方もいらっしゃいますが、やはり温泉に入って自然を楽しんで美味しいものを食べてゆっくりしたいというお客様がほとんどではないかと思っております。

表面ではなく深い本当の日本を知りたいという個人客が増えている

◆中山 朱さんは日本へ来られて10年ということですね。中国人の訪日旅行動向、とくに観光客層やルート、伊豆へ入る目的や伊豆の魅力などお話しください。

◆朱 こんにちは朱珠と申します。私は2007年に中国の海南大学観光科を卒業し、京都で日本語を勉強し、静岡大学大学院に進んで伊豆におけるインバウンドについて勉強させていただきました。現在は「富士山浪漫之旅」という会社で、主にインターネットを通じて中国台湾に日本の観光情報

を発信しております。

中国は独特なところとして、日本に観光に来る時にはビザが必要で、ビザを取るためには旅行会社を通さなければなりません。日本の大使館は個人からのビザの受付は一切していないのです。ですから現地の旅行会社の役割は無視できません。6年前から伊豆地域の商工会議所さんと一緒に中国へ行ってプロモーションを行ったり、中国の旅行会社の方々をこちらへ招待して現地の目線でアドバイスをいただくといった仕事をしています。

当社には個人からも旅行会社からもさまざまな質問が寄せられます。ここへの所要時間はどれくらいか、どういう順番で回れば効率的かといった質問ですね。実際に現地まで足を運ぶまでお手伝いをするのも仕事の一つです。

伊豆に来ている中国人は多いといっても具体的な数字は統計をとっておりませんのでハッキリわかりませんが、団体客は減っている傾向があります。その代わり個人観光客が増えているのが実感としてあります。日本の外務省がHPで発表している数字では、昨年時点で中国人に対するビザ発行枚数は個人が団体を超えています。ただし個人観光ビザが取れるようになったのは、2009年から富裕層に限ってのことで、ある意味歴史は浅いのですが、自由に日本を回りたい、表面ではなく深い本当の日本を知りたいという個人は着実に増えています。東京のような大都市ではなく自然豊かな場所でリフレッシュしたいという目的も増えています。

団体の場合は子どもからお年寄りまで客層の幅は広いのですが、個人の場合は弊社で受けている問い合わせではインターネット利用の若者に集中しているイメージがあります。男性よりも女性のほうが多いですね。ルートの的にも、団体の場合はゴールデンルートがメインで、最近少し変わってきたのは今まで陸上で観光バスでの移動がメインだったのが、クルーズ船利用が増えています。立山黒部の雪の壁やダムを見るといったツアーも人気です。

個人の場合は移動に問題がありますので、団体よりも比較的狭いエリアでの移動です。関西なら大阪京都奈良。関東なら東京箱根伊豆といった回

り方ですね。伊豆に来るお客様は団体の場合、どちらかといえば温泉が目的で、中国でも大変有名な『伊豆の踊子』への憧れでツアーを組む人が多いのですが、個人の場合はさまざまですね。ただ温泉旅館のスタイルをいろいろ体験したいとか、海を見たことがない人は海を見て美味しい海鮮料理を食べたいとか、都会が嫌で自然の中でぼーっとしたいという人もいます。

団体の場合はバス旅行ですので移動中は携帯をいじっている人が多いのですが、個人旅行の場合は移動中もインスタグラムのような独自のSNSで楽しんでいます。電車の中で走っている風景をUPする人もいます。個人は本当にさまざまな楽しみ方をしていますので、多様な情報を提供できればと思っています。

◆中山 中国の方にとって伊豆というのは魅力的な地域ですか？

◆朱 そうですね。たとえば言い方は悪いのですが、長野県、静岡県と言われてもピンとこないと思いますが、伊豆と聞けばわかります。ただし伊豆がどこにあるかはわかりませんが（笑）。本当に伊豆というブランドは『伊豆の踊子』がきっかけで知られていますので、それを利用して情報発信すれば効率的だと思います。

伊豆は仏教美術や神社文化の宝庫

◆中山 よくマーケティングでは「わからないこ



中山 勝氏

とはお客様に聞け」という言葉がありますが、我々はまさに中国の方に教えていただけるのではと思います。

菊池様は県教育委員会で

お仕事をされており、日本遺産の関係で県の担当をされています。2つの立場でお聞きしたいのですが、ひとつは一般県民として、もう一つは教育

委員会のお立場として。ぜひこの伊豆地域で見たいところ、風土や習慣、ジオパークなど地域資源についてお話ください。

◆菊池 一般県民としてですが、私は東伊豆出身でして伊豆の魅力と言っても言いづらいところもありますので、職場の人間に聞いてみたところ「温泉」「景色」「海と山が同時に楽しめる」「河津桜」「熱海梅園」「菜の花」といった答えが返ってきました。最後に一斉に返ってきたのが「石川さゆりでしょう」でした（笑）。やはり天城越えのイメージが強いようですね。

県民のイメージとして温泉に浸かっていい景色を眺め美味しいものを食べるといったところだと思いますが、伊豆は一つではなく東、南、西、内陸と違った見どころがあり、一度来ただけでなく複数回楽しめるようなところと言われました。ただ1泊が大半で長期滞在はどうも定着していないのではと思いました。地元で推進しているジオパークは、ジオパークそのものが見たいというところまではっていない、もっと情報発信が必要ではないかと思います。

県教育委員会の立場としては、伊豆の文化財はたくさんありますが、文化財を目的に来る人はなかなかいないように思います。どちらかといえば温泉に入って美味しいものを食べる、ついでに文化財を見るといった感じでメインディッシュにはならないところかもしれません。

その中で知らず知らずに見ていただいているのがジオポイントです。ジオポイントに登録されているものはほとんどが文化財です。南伊豆、松崎、西伊豆にかけた海岸線は昭和12年に国の名勝に指定されており、複雑かつ多様な地質が特徴であるとジオ的な観点で指定されています。堂ヶ島の天窓洞、清水町の柿田川、伊東市の大室山の天然記念物に指定されています。ジオパークとして見たいものが文化財と重なっているといえます。

世界遺産は登録される前提条件として、国の史跡になって国内法で保護されていることが挙げられます。静岡県は富士山と韮山の2か所、合計10個の構成資産がありますが、異なる世界遺産が同時に2つ見られるのは伊豆の国市だけです。先生

がお配りした資料の最初の写真を見ていただくと、反射炉と富士山が同時に見られることがわかります。

伊豆の国市には数多くの国や県の指定文化財があります。県内で最も指定文化財が多いのは静岡市ですが、伊豆の国市もそれに匹敵する数です。背景には頼朝挙兵や北条氏の歴史があり、北条氏ゆかりの願成就院には国宝の仏像がある。静岡県内で国宝に指定された仏像はこの1体だけです。

伊豆は遠江や駿河に比べて古い仏像が非常に多いんですね。函南町にも『ほとけの里美術館』とか下田市にも『上原仏教美術館』があります。県内でこういった仏教系の美術館があるのも伊豆の特徴で、これがインバウンドにどれだけ効果があるのかわかりませんが、国内のお客様に呼び込むために違った視点で魅力をお伝えできればと思います。

実は神社も多くて、平安時代の書物『延喜式』によると、遠江や駿河合わせても伊豆の方が多いことがわかります。おそらく火山の鎮めのための信仰の地だったことが大きいのではと思います。日本遺産ではありませんが信仰の地伊豆という魅力もあるのではと思います。

他にない特徴としましては、幕末から近代にかけての史跡が多いこと。黒船ゆかりの下田の玉泉寺さんや了仙寺さん、戸田のブチャーチン関連、近代建造物の天城山隧道や松崎町の重文岩科学学校、そのへんをストーリー化したら日本遺産になるのでは思うのですが、なかなかそのストーリー作りが難しいというのが現状です。

平成28年に伊豆地域で4件の文化財が国の指定を受けました。県全体で5件指定され、そのうちの4件が伊豆です。ひとつは伊東市と熱海市にまたがる江戸城石丁場遺跡です。なかなか地元においてもご存じないと思いますが、江戸城を作ったのが伊豆の石、近代の東京の土台となった石を算出したのも伊豆です。「江戸東京は伊豆で基盤が成っている」がキーワードになるでしょうか。

8月にはMOA美術館の木造十一面観音立像が重文に指定されました。10月には沼津市にある旧沼津御用邸が名勝に指定されました。庭園としてではなく、富士山や駿河湾を望む松林の風光明媚

媚な景色が近代の保養地として代表的な景観であるという評価です。

国登録文化財—保護を目的とする「指定」よりも活用に重点を置く「登録」では十国峠と三養荘が登録されました。伊豆地域では近代の保養所や旅館が数多く残っていますので、指定でがっちりとした枠ではなく、活用しながら残す登録文化財にして、保養所や別荘や旅館を登録し、登録文化財の建物の旅館に泊まって温泉に浸かり、庭園を見ながら食事を楽しむといったものもウリになるのではと思います。

ぜひ我々がやらなければならないこととして、地元の教育委員会に働きかけたいのは、先ほど丁野先生から日本遺産がないのが静岡県ほか数県のみ、というお話がありましたが、実は静岡県には他にもない文化財がありまして、重要文化的景観というのが静岡県にはありません。国の方からは「わさび田」とか「漁村の風景」など残したらどうなの？と言われてます。古い町並みでは下田市や松崎町のなまこ壁の建造物も重要伝統的建造物群として残せていければなと思います。見ていただきたい文化財はたくさんあり、歴史資料の掘り起こしが私たちの課題かなと思います。

「選客万来」でリピーターを増やす

◆中山 3人の方から独自の視点でお話いただきましたが、丁野先生、なぜ伊豆に観光客が来るのか、従来の取り組みだけで観光客は満足しているのか、ご発言いただければと思います。

◆丁野 千客万来という言葉があります。観光で飯を食ってこなかった場所で「観光」という言葉を使うとだいたい嫌われるんですね。日本には「観光」という言葉を使って嫌われない地域という



丁野 朗氏

のは実は少ないんですよ。昔からある温泉観光地では使えますが、鉱工業都市や農業がさかんな土地では「なんでうちが観光をやらなければならないんだ？」と必ず言われます。

観光は語源的に言えば「国の光を見る」ということですが、その地域の光とは何かということ。日本遺産は地域の光をもう一度再発見しようというものです。伊豆の光とは何だろうということを考えなければなりません。

千客万来の「千」は千人＝多いという意味合いで使います。基本的にはマスを対象にした言葉で、大量のお客様を呼び込むシンボリックなものが必要ですね。伊豆にはロケーション、温泉、食、多様な自然があったがゆえに来たわけですが、もうひとつ「選客万来」という言葉があります。私は好きでよく使うんですが、客を選ぶということですね。

今なかなか観光において1000人集める3割バッテリーというのがなかなかいないのです。どの地域もいろんなテーマにばらけている。先ほどからうかがっているお話でも、文豪、ジオ、サイクリスト、アート……こういうものは1個1個みるとそんなにたくさん来ない。しかしテーマを持ってくる人たちはリピートするのです。何度も何度も来てくれる。仮にマスが100だとして「選」が2しか来ないとしても、その人たちが5回、テーマが10あれば100になります。これからの観光地の作り方とはマスとテーマ、「千」と「選」の組み立て直しが必要ではないかと思います。

菊池さんのお話でドキッとしたのは、近代の伊豆というのは確かに盲点です。実は今それを京都がやっているんですね。京都は実は工業都市で、琵琶湖疎水が完成していなかったら京都の人口はいまだに50万人を超えていなかったというのが私の仮説です。水にとってもシビアな町で、水がなければ人は住めないし工業も興せない。案の定、琵琶湖疎水は通船事業で始めたのですが、落差を活かして発電をし、明治26年に蹴上に日本初の商業発電所を作り、路面電車を通し、西陣の機織り物を復上させて島津製作所のような企業をどんどん生み、ビールも造った。実は京都は工業の面でも先進都市でした。大量の水を持ってきたゆえ

に動力によって発展した。そういうテーマで京都をとらえ、琵琶湖疎水を日本遺産、いや世界遺産にもしたいという動きがあります。

菊池さんから近代という視点を提案していただき、別荘や保養所があり、そこに文人墨客が来る。ちょっと視点をずらして編集してみると、とんでもなく面白いものが見えてくる。同じ資源ですが、どういう編集をし、赤い糸で貫くか。そこが勝負どころかなと思います。そこに素敵なキャッチフレーズが付けば唸りますよね。

概念的なものよりも五感に訴えるものを

◆中山 菊池さんにうかがいます。日本遺産のない県の一つ静岡県の状況はどうなっていますか？他の市町も申請に向けて動いているようですが、いかがでしょうか。

◆菊池 静岡県の状況ですが、平成30年度の認定



菊池 吉修氏

を目指しているのは伊豆市と河津町。それから三島市が箱根町と小田原市と連携しています。それから掛川市。また浜松市を中心とした三遠南信地

区が目指しているところです。掛川市の場合は街中にある建物を活かしたストーリー。三島市は箱根旧街道。三遠南信は各地に伝わる民俗芸能をテーマにされているようです。

今までまったく申請していなかったというわけではなく、平成26年度には静岡市が単独で徳川家康をテーマに、27年度は静岡・浜松・岡崎が共同で家康をテーマに申請したのですが、家康はなかなかメジャーな存在なので新鮮味がなかったせいか残念ながら認定されなかったようです。

今、伊豆市と河津町が動いています。他の市町にも連携ができるなら進めたいという意見がありました。最初に「温泉と文豪と行きたい」とい

ったときは今まで聞いたことがないテーマなので面白いと思いましたが、伊豆だけでなく那須や城崎など温泉と文豪ゆかりの場所がたくさんあります。そういうところと伊豆ならではの特徴をどうやって差別化させるか。文化庁からは日本遺産はオンリーワン、ナンバーワンの特徴だといわれますので、その点が今後の課題かなと思います。

たとえば水ですが、水というテーマは競合が多くてハードルが高いと聞いています。水が何をもたらすかといえば湿潤な気候ですね。そこに温泉やわさびという温かいものと涼しいものが生み出される癒しの空間、そこに惹きつけられた文豪というようなストーリーかなと思っています。日本遺産を目指すにあたっては、概念的なものよりも五感に訴えるものが重要だと言われています。もちろん見るということも重要なポイントですが、実際に触れるもの、体験できるもの、味わえるものですね。

「わさび」というキーワードもありますが、わさびは世界農業遺産の登録を目指しています。文化庁は歴史的にも評価できるのではないかと考えていますので、農業として世界クラスを目指す一方で、歴史的なわさび栽培を日本遺産としてうまい具合に位置付けていけたらと思います。

外国人に付加価値を伝える努力を

◆中山 五感に訴えるというお話がありましたが、朱さん、中国の人にとって五感的に魅力のある素材はありますか？よく稲取のキンメダイが美味しくて食べたいと。しかも漁港の風景の中で食べたいとか、戸田でも餌やり体験をしてみたい等聞きますが、中国の方が興味を示すものがあれば教えていただけますか？

◆朱 伊豆の踊子という小説と映画は、今の50代以上の中国人で知らない人はいないくらい有名です。若い人は小説や映画を観ていなくても名前は知っています。伊豆に来ている中国人の団体ツアーで定番化されて入るのは浄蓮の滝と河津の七滝です。なぜかといえば伊豆の踊子に関係しているポイントだから。ただし実際に来たときの感想は、すごく感動して涙が出そうな人がいる一方で、



朱 珠氏

なんだこりゃ、こんな小さな滝のどこに魅力があるんだという若者もいるんです。失礼な言い方になってしまうんですが、たとえば中国やアメリカ

には全然インパクトが大きい滝はいっぱいあります。わざわざこの滝を見なければならぬのは、映画や小説を知らないとわからないし、予習として映画や小説を見てくださいますともいえないので、現地に来たらガイドさんが情報提供し、ただの滝ではないという付加価値を付けていただければと思います。

三嶋大社の例を申し上げますと、東京の明治神宮など大きな神社がほかにもたくさんありますので、三嶋大社でしか観られないもの、ここしかできないという体験を伝えてあげなければならない。そこで三島市役所にお願ひし、神職の方に案内していただきました。

中国には神社文化がありませんので、まず神職の服装にインパクトがありましたね。次にお祈りの作法。明治神宮に行ったときは鳥居の入口で集合時間を伝えて、はい解散。ツアー客は日本人が手を洗ってパンパンと叩く意味がまったくわからず、ただ写真を撮って、集合時間よりも早く集合場所に集まってしまった。すごくもったいなかったですね。

三嶋大社で体験してもらったのは、たとえば真ん中は神様が歩く道なので皆さんできるだけ両側を歩きましょうとか、三嶋大社のこちらの池は富士山の水、むこうは箱根の水で、同じ場所で二か所の水ですと説明する。皆びっくりします。

個人的に印象に残ったのは、参拝する前、手と口を洗いますが、神職から、柄杓の棒を洗うのは次の人のためですと教えられると、お母さんが自分の子どもに対して「ここ覚えた?」「次の人のためにやるんだよ」と強調していたのです。神社

の文化とは直接関係ないかもしれないけどちょっと違うなと思いました。

ツアーでは正式参拝はしないのですが、大社の中には中国の親孝行の14孝という物語が彫刻されています。中国には親孝行の文化がありますので、共感がしやすく話もわかりやすい。ありのままを見せることも大事ですが、良さを分かってもらう工夫がもう一歩必要かなと思います。

中国の人は観光ビザを取るため、一定の資産が必要です。つまり日本に来るのはある程度裕福な人です。その人たちは変な話、北京や上海にあるようなものを見せても魅力は感じない。逆に非日常の港の文化とか自然とのふれあい、たとえば漁船に乗ってカモメに餌付けをやるとか、中国人は世界一のものが大好きですからタカアシガニを持って写真を撮って足を抜いて食べてSNSで拡散させたがる。SNSの影響力は無視できないくらい凄いです。地元の景色や観光施設にも魅力がありますが、中国のSNSを見ると「伊豆の人は非常に優しい」ということを結構発信しています。

中国の人は本当にどこにでも行っています。たとえばある中国人男性は1週間伊豆に滞在し、そのうち3泊は下田で、泊まっているペンションから駅まで毎日同じバスに乗った。3日目になるとバスの運転手さんから「おはよう」と声を掛けられ、そのときの感動は全然違うといっていました。飲食店ではメニューが全部日本語で魚の名前もわからず、お年寄りが経営している店なので言葉も通じない。たまたま隣に座っていた若い人がスマホを取り出し、最初は自動翻訳機能を使ってもうまくいかなかったのですが、最後には直接、魚の写真を見せてくれてわかったそうです。

その後、彼はものすごく長い文章のブログを書いて、伊豆は景色だけじゃなくて地元の人たちがすごく優しかったと強調していました。その人は去年来て今年来て来年もまた来ると言っていました。完全にリピーターですね。自分だけじゃなく、去年は家族と、今年は友だちの家族と一緒にでした。最初は東伊豆、今年は中伊豆、来年は西伊豆を回ると言っていました。

伊豆の良さを海外の人がわかってくれたら、リピーターや長期滞在は可能性として十分あると思

っています。

精神的に豊かだった湯ヶ島の人々

◆中山 従来の文豪墨客の人がこの地の旦那さんに親切にされたという文化が残っているのでしょうか、今の魅力はどういう歴史や文化があっつながらいるのかを考えなければなりませんね。宇田さんにうかがいますが、湯ヶ島の歴史を見ると金山、しいたけ、わさび等いろいろなものがあって湯ヶ島の発展につながってきたという話を聞いたことがあります。

◆宇田 歴史にはそんなに詳しくはありませんが、



宇田 治良氏

伊豆全体に言えることは、伊豆は昔から流刑の地・流人の地と言われてきました。政治犯ですから血統の良い人たちが地域に入ったという独特の

歴史があると思います。

応神天皇の時代、史話では天城の松ヶ瀬というところで軽船を作り、その船は大坂港から小豆島まで天皇の水を汲みに行く船だったそうです。江戸時代は伊豆には幕府を支えた三大金山があります。湯ヶ島は慶長4年から34年に亘って金の産出をしています。小さな村でしかも山奥に下千間、上千間と1000人ぐらい入る長屋があったそうです。山の中にはそういった特異な社会がありました。江戸時代、土肥で産出した金は40トン、湯ヶ島は19トンと土肥に比べれば期間も短く半分の量ですが、46年間ずっと金を産出していた歴史的には面白い土地でした。

伊豆半島はご存知の通り太平洋側につき出した半島で、黒潮の影響を受け、海岸線は海洋性の気候ですが、伊豆半島の真ん中にある天城山はU字型の連山で、U字型の底に湯ヶ島があり、独特の気候を持っていて、ちょっと暗くてメランコリー

な温泉場です。それに惹かれて川端康成が来たのだと思います。湯本館に10年間留まったと言われますが、小説に登場する福田家に滞在していたらもっと明るい伊豆の踊子になったと思います。そういう違いが峠を挟んで北と南にあると思います。

川端康成は非常に温泉好きな作家ですが、当時の一高生には伊豆の旅ブームがあったといわれま。ブームを作ったのは島崎藤村で、彼は明治42年に駿豆線に乗り、馬車に乗って1泊目は新井旅館、2泊目は落合楼に泊まった。それから天城を越えて下田まで行ったことを「伊豆の旅」という本にまとめ、一高生が読んだとされています。そのブームに乗って伊豆に入ってきたのが川端だといわれます。3歳違いの深田久弥がそのブームの頃、4万分の1の地図が伊豆半島だけなかったので、伊豆にはまったく興味がなく、信州の山に登りに行っていたとどこかで書いています。

とにかく一高生がどんどん伊豆に入った時代だったのです。川端康成が湯ヶ島に留まったのは、湯ヶ島の人が金銭的に豊かでなくても精神的に非常に豊かであったからだと思います。なぜかといえば、金の開発があり、湯ヶ島には元禄の頃、日本で初めて椎茸の人工栽培に成功した地域で、企業秘密でその技術を外に出すことはなかったそうですが、幕府の産業振興の一環で山守の板垣勘四郎が有東木に派遣されています。有東木は安倍川上流で家康が保護していたわさびの一大産地で、板垣は記録では1774年に入っています。そこで2年間椎茸の技術を伝授し、見返りにわさびの苗と生産方法を持ち帰り、そこから湯ヶ島のわさびが始まったといわれます。

明治2年の湯ヶ島村の稼ぎ高台帳というのがありまして、その中で1年間の生産高は784両あり、わさびは450両、椎茸は150両と村にはかなりの収入があったようです。しかも温泉のある宿場町として機能していましたからいろいろな人との交流がありました。そういう背景があったので、排他的ではなく閉鎖的でもなく、旅人を温かく迎えた。川端康成のような作家が入ってきた時も温かく迎えたのでしょう。そのおかげで作家が湯ヶ島でいろいろな名作を作ったということです。

地域の未来や元気をつくっていくことが、 隠された物語の軸になる

◆中山 丁野先生、オリジナルストーリーを作る際、注意事項のようなものがあればお話しいただけますか？

◆丁野 ジオパークの資料に素敵な言葉がありましたよね。『南からの贈り物』。なんだろうと思いました。意味はちゃんと書いていない。たとえば温泉はそうですが、景観も素晴らしいし、鉱山もわさび田もしかり。この地形はオンリーワンですから、その中身をちゃんと説明し、今の暮らしぶりや身近なものをつなっていることを、ちゃんと書き直した方がいいのではないのでしょうか。何かストーリーの一貫性がほしいなと思います。

文化庁も日本遺産を作って3年目になります。国の地域活性化策は来年以降も新手の支援策がいろいろ出てくるとは思いますが、これが本当に未来に向けた事業として成功するのか、補助金に頼らなくても回っていきえるのか、そこをものすごく見えています。ストーリーをどう事業化するか。わさびの未来を考えただけでもやることはたくさんあるわけですよ。未来に向けてこの地域の新たな経済基盤とか新たな地域活性化の軸になるものをちゃんと描けるかが、隠れた審査ポイントになっていくと思います。

80~90件近い申請の中でも、話は面白くても未来が見えないというものがたくさんあります。それではだめですね。地域の次の未来・元気をどうやってつくっていくかが隠された物語のもう一つの軸になります。

私の郷里・高知では中岡慎太郎が貧しい山村にユズを植えさせました。奥には魚梁瀬という日本で最後まで黒字を叩き出していた営林局があったところで、250kmの森林鉄道が通っていました。それがトラック輸送に替わり、鉄道が廃れ、一部はダムの底に沈んだのですが、鉄道の跡地に丹念にユズを植えた。それが現在、日本のユズの7割を占めるユズ大国になり、ユズは高知の食文化の原点になった。村がダメになってもユズで未来を繋ぐというストーリーに審査員はグッと来ました。

我々は地域の未来というものを欲しがっています。そういう未来を描いてほしいと思います。

◆中山 今日お話をさせていただいたのは地域振興策であり、日本遺産の申請も目的ではなく一つの手段です。たとえば伊豆の国市さんでもどのようなストーリーができるか、三島市さんで取り組まれていることもそういう形になると思います。

日本遺産に関して言いますと、湯ヶ島河津ではシリアル型といいまして、前提条件として歴史文化の基本構想を持っていなければ単独の市や町では申請できないということがあります。伊豆の国市さんはそういう基本構想をお持ちで、単独でもできる前提条件がひとつクリアできていますので、そういうことを踏まえ、ストーリーを考え、地域活性化策に取り組んでいただきたいと思います。

サンフロント21懇話会としてもお話しいただいた内容を踏まえ、日本遺産の申請登録を支援してまいりたいと思います。どうもありがとうございました。

〈略 歴〉

◇パネリスト

■菊池 吉修 氏(きくち・よしお)

静岡県教育委員会文化財保護課班長

1995年に遺跡の発掘等に携わる埋蔵文化財専門職員として静岡県に採用。2008年より文化財保護課で、文化財保護を担当する傍ら、日本遺産申請業務にも携わる。

■宇田 治良 氏(うだ・はるよし)

天城湯ヶ島温泉「白壁荘」代表取締役

1956年伊豆湯ヶ島生まれ、大学卒業後、民話と民芸の宿「白壁荘」二代目主人。湯ヶ島を文学の郷にするべく活動中。「川端康成はなぜ10年間湯ヶ島に留まったのか」「井上靖は何に触発されて作家になったのか」など、地元ならではのエピソードを中心に、文学散歩の案内人も務める。

■朱 珠 氏(しゅ・じゅ)

富士山浪漫之旅

中国四川省出身。ホームページ、ブログ、SNS、動画サイトを通じ、中国向けに伊豆や県東部の情報発信をする傍ら、中国や台湾からの旅行客をアテンドする。観光商品の企画、地元施設や企業受け入れの態勢づくり、販路開拓など多岐にわたり活躍。

◇コーディネーター

■中山 勝 氏(なかやま・まさる)

企業経営研究所常務理事

慶応義塾大学大学院修了。スルガ銀行入行後、1982年企業経営研究所出向。主席研究員を経て、08年常務理事。静岡県、沼津市、三島市などの委員や日本大学非常勤講師などを務める。サンフロント21懇話会TESS研究員。1958年静岡県生まれ。